

『神様』

川上弘美 著 中公文庫 660円(税込)

くまと歩いた、忘れられない一日

会員 中澤 泉 (69 期)



「くまにさそわれて散歩に出る。」この一文で始まる小説を、教科書で読んだ方も多いのではないだろうか。川上弘美のデビュー作にして、短篇集『神様』の表題作。第一回パスカル短篇文学新人賞に輝いた一篇である。

同じアパートの三つ隣の部屋に、本物の熊が越してくる。その「くま」と川原へ散歩に出かけ、また帰ってくる。それだけの静かな一日の話だ。

「くま」は、越してくるなり、同じ階の住人に引っ越し蕎麦を振る舞い、はがきを十枚ずつ配って回る。「わたし」の遠い親戚が、昔くまが世話になった人と知ると、そこに「縁」を感じ入る。なんて昔気質なくまだろう、と「わたし」は思う。

けれど、読み進めるうちに、その丁寧すぎるふるまいの見え方が変わってくる。人間の世界で浮かないように、怖がられないように、くまは精いっぱい気を付けているのだ。そう気づいた瞬間、彼のふるまいは笑えるものではなくなる。むしろ、胸が痛くなるほど孤独だ。

「くま」は、ようやく見つけたつながりを手放さないように、「わたし」を散歩へ誘う。散歩中も、くまの気づかいは徹底している。毛皮の分、自分のほうが暑いだろうに、「わたし」の体調を気にかける。魚を捕れば、そのまま食べずに干物にしてくれる。オレンジの皮を食べるときは、「わたし」に背を向ける。

途中で出会った子どもには、熊だ熊だとはやし立てられ、しまいには腹を叩かれる。それでも「くま」は怒らない。傷つかないはずがないのに、彼は人間の世界に居続けるため、怒ることさえ慎んでいるように見える。

別れぎわ、「くま」は初めて熊らしいふるまいを見せる。親しい人と別れるときの故郷のならわしだと、抱擁を願い出るのは。唸り声をもらし、故郷の習慣を語るその姿は、人間に合わせてきた彼が、本当の自分を見せた瞬間でもある。

応じた「わたし」は、くまの体を「思ったよりも冷たかった」と感じる。毛皮だから温かいはず、熊だから怖いはず。そんな思い込みが、少しだけほどける場面だ。

二人は、巻末の続篇「草上の昼食」にもう一度あらわれ、再び散歩に出る。そこでは、「くま」は以前より息が荒く、毛並みも密になり、抑えられない野生をのぞかせている。草原では、くまが作ったごちそうを食べる。人間の世界になじもうとして、丁寧に支度をしたのだと思うと切ない。それなのに、彼は故郷へ帰ると告げる。とうとう、この世界に居場所を見つけられなかったのだ。

帰り際に雨が降る。雷が鳴り、くまが「わたし」を包む。近くに雷が落ちたような衝撃が走ると、くまは腹の底から何度も吠えつづける。その姿に、「わたし」は恐怖を感じる。やさしい隣人でありながら、人間とは異なる自然の存在でもある。その二重性が、ひやりと胸に残る。

どんなに歩み寄っても、越えられない一線がある。自分とまるで違う隣人と、どう向き合い、どう並んで歩くのか。その問いが、静かに残る。

短篇集には、梨を食べる白い生き物や、河童、人魚といったふしぎな生き物たちの話も収められている。どれも、やさしいだけではない。ぞくりとする怖さのぞく。その両方を、この一冊で味わってほしい。